様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：２５４０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８１３３０

研究課題名（和文）学校における教員と作業療法士の連携・協働モデルの開発－スクールAMPSを用いて

研究課題名（英文）Development of a model for collaboration between school teachers and occupational therapists in school- using School AMPS

研究代表者
古山　千佳子（Koyama, Chikako）

県立広島大学・保健福祉学部（三原キャンパス）・准教授

研究者番号：９０２８０２０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：特別支援教育における教員と作業療法士（OT）の連携・協働のバリアを明らかにしつつ，スクールAMPS（S-AMPS）を使用するOTを育成し，実践事例を収集した。さらに，発達支援に関わる専門職を対象にプレイバックシアターワークショップ（PB-W）を開催した。その結果，教員とOTの連携には，①連携のシステム，②職種間の理解と関係性，③OTの専門性に関するバリアがあり，学校等へのOTの関わりを困難にしていた。実践事例からはS-AMPSの使用が教員とOTの連携・協働を促進する可能性が示され，PB-Wの実施が専門職間の共感性を高める可能性が示された。以上の結果から教員とOTの連携・協働モデルを提案した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we clarified barriers that exist in collaboration between school teachers and occupational therapists (OTs) in special needs education, increased the amount of OTs that can use School AMPS in school, and gathered case examples. Furthermore, we conducted playback theatre workshops for people who support children with disabilities. The results showed there were three types of barriers in collaboration between school teachers and OTs: systems for collaboration between school teachers and OTs, understanding and relationship between school teachers and OTs, and the educators' / occupational therapists' expertise. These barriers made Occupational Therapy difficult to facilitate in schools. From case examples, collaboration between school teachers and OTs were promoted by using School AMPS in school. It was suggested that playback theatre workshop may enhance empathy among professionals. As a result, we propose a model of collaboration between school teachers and OTs.

研究分野：作業療法学

キーワード：特別支援教育　作業療法士　教員　スクールAMPS　連携　協働

1．研究開始当初の背景

平成 19 年に学校教育法に特別支援教育が明確に位置付けられたことで，特別支援教育に対する保健医療福祉専門職の関わりが強化され，学校等への作業療法士（以下 OT）の関わりが増加した[1)]。そんな中，わが国の学校等（特別支援学校，小中学校，幼稚園を含む）に関わる OT の多くは，特別非常勤講師や巡回相談員として学校を訪問し，幼児児童生徒の問題を観察し，助言するなど，単発的で表面的な関わりに留まっている（図 1）。

筆者らの研究では，学校版運動とプロセス技能評価（以下スクール AMPS）[2)]を用いて児童生徒の学校課題の遂行能力を評価し，教員にフィードバックした結果，教員が児童の具体的な課題遂行能力を理解し、教員と OT が連携して児童の問題解決に取り組むことができたこと[3)]。やスクール AMPS の結果に基づく提案により教員自身が状況に合わせたやり方に変更できるようになったこと[4)]が明らかになっている。すなわち，スクール AMPS を媒体に教員と OT の連携・協働が促進され，その結果児童生徒の課題遂行能力に変化が生じる可能性があることが示唆された。これらの結果をもとに，スクール AMPS を介した連携モデルを提案した（図 2）。

スクール AMPS とは，OT が幼稚園や学校等の教育現場で使用する観察型評価である。教員が児童生徒にとって苦手と考える学校課題を明らかにし，教室でその課題を教員と児童生徒が実施している場面を観察し，採点する。スクール AMPS は標準化されており，有能性の基準であるカットオフ値や児童生徒の同年齢の健常児と比較することができるし，細かい観察結果から，児童生徒の苦手な行為や得意な行為が明らかになり，教員と共に児童生徒の目標や取り組みを考える際の情報として有用である。ただし，スクール AMSP の使用には 5 日間の講習会参加が必要であり，わが国では過去に 6 回の講習会が開催されている。しかし，スクール AMPS を用いて学校で作業療法を実践したという報告は少なく，その原因は明らかではない。

OT を含む保健医療専門職が教員と連携，協働するためには，お互いの専門性や経験を理解することが必要である。プレイバックシアターは，テラーが語るストーリーをアクターがその場で演じる即興劇であり，他者と経験を共有することで共感性が養われるなどの効果が期待できる[5)]。教員と OT が互いの経験を共有し，互いの専門性への共感を深めるという点で，教員と OT の協働を促進するツールの１つになるかもしれない。

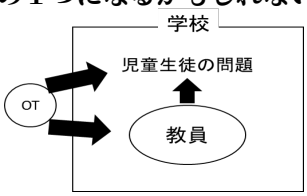

図 1　外部助言者としての OT の関わり

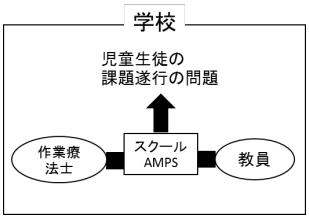

図 2　スクール AMPS を介した連携モデル

【文献】

1) 岡野康子，高橋広行：地域と学校での実践－地域の特別支援教育コーディネーターとして．作業療法ジャーナル 41，295-300，2007.
2) Fisher A, Bryze K, Hume V, Grisworld L: School version of the Motor and Process Skills. Three Star Press Inc., Fort Collins, 2007.
3) 古山千佳子，吉川ひろみ，高木雅之，引野里絵，松田かほる：School AMPS を用いた作業療法の試み．作業療法 29，780-788，2010.
4) 高木雅之、引野里絵，古山千佳子，吉川ひろみ：保育園での作業療法士による評価と相談－School AMPS と COPM を用いて－：作業療法 31，32-40，2011.
5) 宗像佳代：プレイバックシアター入門－脚本のない即興劇－．明石書店，2010.

2．研究の目的

本研究の目的は，現在の特別支援教育における OT と教員の連携の実態を明らかにし，教員と OT による理想的な連携・協働モデルを提案することである。そのために，学校等で OT が学校に行き，作業遂行を観察評価することに対するバリアは何かを明かにする。そして，スクール AMPS を用いて作業療法が実践できる OT を育成し，学校等でスクール AMPS を用いた実践例を集め，特別支援教育の中に客観的指標を組み込む意義を明らかにする。最終的に，教員と OT の連携・協働モデルを提案する。

3．研究の方法

本研究の目的を達成するために，下記の１）～５）を実施する。

１）スクール AMPS 講習会の開催

スクール AMPS を使用して学校等で作業療法を実践する OT を増やす目的でスクール AMPS 講習会を開催する。その際，受講生に対し，アンケートを実施する。アンケートの質問項目は，勤務先の種類，勤務先の OT 人数，OT 経験年数，CPU の使用経験，受講動機およびきっかけ，学校課題への介入頻度，学校環境での介入頻度，受講後の感想とする。

２）学校等における教員と OT の協働に関する研修会の開催とグループインタビューの実施

学校において作業療法を実践している，ま

たは興味がある OT および学校教員等に対し，インターネットを通して研修会への参加を呼びかける。研修会のテーマは「学校等における教員と作業療法士の協働－スクール AMPS を用いた実践」とする。研修会を実施した後，教員と OT の協働のバリアと工夫をテーマにグループインタビューを実施する。グループインタビューの内容はオーディオテープに録音し，逐語録を作成した後，類似した内容をまとめてカテゴリーを抽出する。

３）スクール AMPS を用いた作業療法実践事例の収集

スクール AMPS 講習会を受講した OT に対し，スクール AMPS を用いた作業療法の実践事例の提供を依頼する。集められた実践事例をまとめ，学校における教員と OT の連携・協働の現状に関する情報収集を行う。

４）プレイバックシアター研修会開催

保健医療専門職（医師，作業療法士，言語聴覚士，心理士等）と教育専門職（学校教員，保育士等）が互いの経験を共感し，連携を強化することを目的に，プレイバックシアターワークショップを企画し，実施する。ワークショップ実施後に，参加者を対象としたアンケートを実施し，プレイバックシアターが連携・協働に与える影響について検討する。

５）研究１）～４）を基に，学校等で OT が教員と連携・協働するためのモデルを検討し，提案する。

４．研究成果

１）スクール AMPS 講習会の開催

スクール AMPS 講習会を計 3 回開催し（平成 28 年 3 月，平成 29 年 2 月，平成 30 年 2 月），計 39 名の OT が受講した。ただし，1 回の講習会で 40 名（計 120 名）の受講生を募集したが，定員を満たすことはできなかった。スクール AMPS 講習会は 5 日間の日程で行い，スクール AMPS の概要，運動技能とプロセス技能の概要，ケースの採点練習，信頼性・妥当性研究等について講義を行った。

受講生 39 名中 20 名（51.2%）からアンケートの回答を得た。受講生の勤務先は発達障害を対象とした通院施設が 7 名，身障病院，養成校教員が 4 名，地域の訪問施設，教育委員会，特別支援学校が 2 名，発達療育センター，小児デイケア，放課後児童デイ，保育所等訪問支援，発達障害入院施設等が 1 名だった（複数回答）。勤務先の OT の人数は平均 9.4 名（1～60 名），受講生の OT 経験年数は平均 9.9 年（2～19 年）だった。受講動機およびきっかけは，作業療法の結果を客観的に示す必要がある 14 名，新たな評価法を学びたい 12 名，モデルや理論を学びたい 6 名，研究で使用したい 4 名，教育で使用したい 3 名，その他上司から勧められた 1 名，他の講習会で知った 1 名などであった（複数回答）。学校課題への介入頻度は，ほとんどなしが 7 名，2 週間 1 回が 6 名，週 3 回以上が 3 名，週 1 回が 2 名，月 1 回が 1 名，無回答 1 名だった。また，学校環境での介入頻度はほとんどなしが 9 名，月 1 回が 3 名，週 3 回以上が 2 名，週 1 回と 2 週 1 回が 1 名，無回答が 4 名だった。受講後の感想には，他の OT との情報交換ができた，学校課題に焦点をあてた評価と介入の視点や技術が身についた，新たな評価ツールを得た，客観的評価ができそう，家族や教員への説明がしやすそう，観察の視点が変わった，作業に焦点を当てることの重要性が判った，実践でどのように使えるか考え実行したい，などがあった。

２）学校における教員と OT の協働に関する研修会とグループインタビューの実施

学校における教員と OT の協働－スクール AMPS を用いた実践－というテーマで，平成 28 年 3 月 17 日，県立広島大学三原キャンパスにおいて研修会を実施した。参加者は，学校に関わる OT15 名，学校教員 2 名，スクールカウンセラー1 名だった。研修会の内容は，学校における教員と OT の連携・協働に関する研究報告と事例紹介を行った後，3 つのグループに分かれてグループインタビューを行った。

グループインタビューの結果，教員と OT の連携・協働のバリアに関する意見（35 ラベル）と教員と OT の連携・協働を推進するためのポイントに関する意見（10 ラベル）が述べられた。これらのラベルを類似した内容ごとにまとめた結果，教員と OT の連携・協働のバリアに関する 12 のカテゴリーと促進のためのポイントの 5 つのカテゴリーが抽出され，最終的に 3 つのテーマが明らかになった。

教員と OT の連携・協働のバリアに関する 12 のカテゴリーは「教員の努力のみでは OT との連携は困難」，「OT が学校に関わるきっかけがない」，「学校側の受け入れが未整備」，「連携回数と時間不足」，「表面的な関わり」，「立場が対等ではない」，「教育と医療の壁」，「OT への教員の理解不足」，「OT の専門性を説明できていない」，「互いの仕事内容を理解していない」，「学校 OT の成果が示されていない」だった。連携促進のポイントに関する 5 つのカテゴリーは「OT を判りやすく説明し，理解してもらう」，「具体的な成果を明確に（数値）で示す」，「連携できる環境やシステムの構築」，「親を巻き込む」，「コーディネーターの必要性」だった。以上のバリアに関するカテゴリーから 3 つのテーマ①連携のためのシステムに関するバリア，②教員と OT の職種間の関係性に関するバリア，③学校における OT の専門性に関するバリアが抽出された。

３）スクール AMPS を用いた学校等での作業療法実践事例の収集

スクール AMPS 講習会を実施した後，スクール AMPS を用いて学校で教員と協働し

て作業療法を実践している OT に対し，事例提供を依頼した。その結果，次の 6 事例が報告された。以下に事例報告の概要を示す。

【事例 1】

小学校２年生で通常学級に通う男児に対し，OT がスクール AMPS（ハサミで直線を切る，名前を描く）で観察評価を行った。その結果，運動能力値は 1.7 ロジット，プロセス能力値は 0.7 ロジットだった。以上の結果を教員と共有し，CO-OP アプローチを用いてハサミを使ってはみ出すことなく線を切ることと，漢字で名前を書くことを練習し，スクール AMPS で再評価を行った。その結果，運動能力値は 0.7 ロジット，プロセス能力値は 0.8 ロジット向上した。

スクール AMPS を用いたことで作業療法の効果を教員に客観的に示すことができ，重要な実践に繋がった。

【事例 2】

保育園に通う自閉症スペクトラム（ASD）の男児（４歳）に対し，OT がスクール AMPS（なぐり描き，色塗り）で観察評価を行った。その結果，軽度から中度の身体的努力の増大と効率性低下がみられ，しばしば援助を必要としたが安全に課題を行うことができた。運動能力値は 1.2 ロジット，プロセス能力値は 0.1 ロジットだった。以上の結果から，課題中に気が反れて離席することが課題遂行に大きく影響していることを教員と共有し，まずは対象児の動きたい欲求を満足させるために，リトミックや屋外で道具を使った遊びを導入した。また，1 日のスケジュールを文字で示す事や、一斉指示を言葉と文字で伝えるなど視覚支援を強化した。

子どもの行動の特徴や作業する際の様子をそのまま記述していたが，スクール AMPS を用いることで新しい見方や報告の仕方があることが判った。対象児の特徴を客観的に示すことができた。その一方で，結果の解釈の仕方と結果を介入に繋げる技術を身に付ける必要がある。

【事例 3】

幼稚園に通う自閉症スペクトラム（ASD）の男児（４歳 10 ヶ月）に対し，OT がスクール AMPS（色塗り，貼る）で観察評価を行った。その結果，中等度身体的努力の増大と効率性低下がみられ，しばしば援助を必要としたが安全に課題を行った。運動能力値は 0.8 ロジット，プロセス能力値は-0.8 ロジットだった。塗る際に枠からはみ出たり，1 つの工程を必要以上に繰り返すこと，課題全体が遅いことなどが課題遂行に大きく影響していた。以上の結果から，保育士に，微細運動を要する課題を導入し，枠線を太く大きいものにし，ホワイトボードに手順や手本を示すなどの提案を行った。

スクール AMPS を使ったことで技能項目に基づく観察結果をより細かく伝えることができた。その一方で，児童生徒に対する教員や家族の認識とスクール AMPS の結果に差が生じた場合，説明がしにくいという問題があった

【事例 4】

特別支援学校中学部 2 年で，ダウン症、中度の知的障害を有する男児に対し，OT がスクール AMPS を用いて，絵を描く課題や色を塗る課題を観察評価した。その結果，軽度の身体的努力の増大と中度の効率性低下がみられた。運動能力値は 1.5 ロジッと，プロセス能力値は-0.1 ロジットだった。以上の結果を教員にフィードバックした後，教員と共に対象児の目標を決め，教室のルールを明確にしたうえで教員が作成した教材を用いて色塗り課題を繰り返し練習した。その結果、スクール AMPS 運動能力値が 0.4 ロジッと（1.5→1.9 ロジット），プロセス能力値が 0.6 ロジット（-0.1→0.5 ロジット）向上し，目標にも到達することができた。

【事例 5】

特別支援学校中学部 2 年で，重度の自閉症、知的障害を有する男児。OT がスクール AMPS を用いて評価した結果、軽度の身体的努力の増大と中度の効率性低下がみられ，頻繁に教員の援助を受けていた。運動能力値は 1.3 ロジット，プロセス能力地は-0.2 ロジットだった。フィードバックした結果，教員自身が援助量の多さに気づき，援助量の軽減と課題難易度の調整を行った。その結果，スクール AMPS の運動能力値には変化はなかったが，プロセス能力値が 0.5 ロジット（-0.2 ロジット→0.3 ロジット）向上し，生徒自らが道具を準備し、課題を始め、完了するようになった。スクール AMPS を用いたことで教員自らが援助量の多さに気づき，OT と共に解決策を検討することができた。

【事例 6】

特別支援学校中学部 2 年で，自閉症、軽度の知的障害を有する女児。教員は，対象児が指を使って計算し、繰り上がり算ができないことを問題だと考えていた。OT がスクール AMPS を実施した結果，課題遂行能力は年齢相応に保たれており，回復モデルや習得モデルの効果が期待できることがわかった。以上の結果をもとに教員と協議し，道具を工夫し，時間をかけて計算課題を繰り返し練習した。約 3 ヶ月後，スクール AMPS の結果には変化がみられなかったが，指を使わず計算ができるようになった。

４）プレイバックシアター研修会の開催

研究２）の結果から，OT などの保健医療専門職と教員の立場は対応ではなく壁があること，表面的な関わりしかできておらず，互いの仕事内容や経験を理解していないといったバリアがあり，それが連携や協働を妨げていることが示された。そこで，教員と保健医療専門職が互いの経験を知り，共感することで連携強化を図ることを目的に，2016 年 10 月 29 日，30 日の 2 日間，尾道特別支援学校および福山大学にてプレイバックシ

アターワークショップを開催した。ワークショップの参加者は 39 名，参加者の職種は学校教員，保育士，児童相談員，小児科医，児童心理士，言語聴覚士，作業療法士だった。

OT であり，プレイバックシアター講師でもある小森亜紀氏の指導のもと，まずは参加者同士が互いを知り合い，気持ちをリラックスさせるためのゲーム等を実施した。その後，自分の経験を語ったり，演じるための練習を行った。最後に，プレイバックシアターの技法を用いて障害児の支援に関わった際の経験をストーリーとして語ったり，語られたストーリーを演じたりした。

参加者は，プレイバックシアターを経験する中で，それぞれの専門職としての立場の違いや壁を取り除き，他者のストーリーを傾聴し，互いの経験を共有し，共感していた。プレイバックシアターが教員と OT の連携・協働を促進する手段の１つになり得る可能性が示された。

【感想】

- 他者のストーリーを見ることで色々な立場に共感することができた。冷静に色々な立場の人の気持ちを考えることができると感じた。
- 共有することで気持ちが楽になることを学んだ。色々な職種の人たちが仲良くなれた。
- 私の経験の中で同じような気持ちになり，一緒だなと少し安心の気持ちになった。
- 他の場面のことも自分だったらどうするかなど考えることができた。
- 人の気持ちに寄り添う一つの方法を見つけられた。よく聴くことが大切だと感じた。
- 自分じゃないものになりきることで自分でないものを知ろうとすることの素晴らしさを感じた。
- 日常生活の中にドラマがたくさんあると思った。テラーの話を自分のこととして聞いて演じることは，傾聴よりさらに深い聴き方になるのではないかと感じた。
- 観客として見たが，日々色々な人が様々な場面を経験しており自分だけではなくその場面を経験している全ての人に色々な思いがあることを知った。
- アクターをすることで人の気持ちを知ることができた。意味がないことはないと感じた。
- 気持ちをシェアすることの意義，表現することの意義がある。
- その場面を第三者的に見られるので，自分に何が足りないか判った。

５）教員と OT の連携・協働モデルの提案

以上の結果から下記のモデルを提案する。教員と OT が連携・協働するためには，まず OT が学校の中に入っていくことが必要である。その中で，教員とは異なる作業療法の視点で生徒の課題遂行を観察評価したり，情報収集したりする（①）。その際，スクール AMPS を使用することで，生徒の課題遂行の質（努力の増大，効率性の低下，援助の必要性，安全性）が明らかになり，生徒の運動能力とプロセス能力を数値で示すこともできるため，教員にとって有用な情報となる。

評価結果や情報をもとに，OT と教員が情報を共有し，生徒の目標や具体的な行動計画を一緒に考える（②）。このモデルでは，OT は生徒に直接アプローチするのではなく，生徒の課題遂行を評価し，その結果をもとに教員と共に目標・計画を立案し，経過をモニターするなど，教員を介して間接的にアプローチする。また，教員と OT の連携・協働をより効果的なものにするために，プレイバックシアターワークショップ等を用いて，互いの専門性を理解し，対等な立場で意見交換できる関係性の構築を図る（③）。今後は，これらのモデルの有用性を実証していく必要がある。

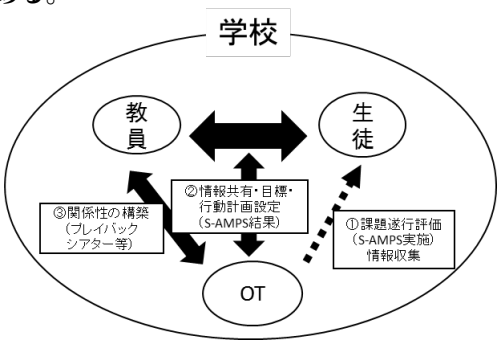

図 3　学校における教員と OT の連携・協働モデル

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

1. 古山千佳子，高木雅之，吉岡和哉：特別支援：特別支援学校における教員と作業療法士の連携－教員へのアンケート調査より－. 人間と科学 18，79-88，2018.

2.古山千佳子，落合俊郎：特別支援学校における教員と作業療法士の連携-色塗りが上手になった事例を通して. 特殊教育学研究 53，205-213，2015.

3. 古山千佳子，吉川ひろみ，高木雅之，引野里絵，林優子：発達障害児の課題遂行能力におけるスクール AMPS に基づいた提案の効果．作業療法 33，75-80，2014.

〔学会発表〕（計　4 件）

1. Chikako Koyama: Playback theatre workshop for people who support of children with disabilities. Asia Pacific Playback Theatre Conference 2017,

2017/11/3-5, Mihara.

2. 古山千佳子，吉川ひろみ，高木雅之，永吉美香，山西葉子：特別支援学校における作業療法の試み-COPM とスクール AMPS を用いて-．第 50 回日本作業療法学会，2016 年 9 月 9 日-11 日，札幌.

3. Chikako Koyama: Case study: occupational therapy practice using AMPS and ESI in special needs school. 3th International OTIPM symposium, 2015/5/30-31, Soul.

4. アン・フィッシャー，古山千佳子，ジ・セギョン，齋藤さわ子，ルー・アン・グリスウォルド：作業中心，作業基盤，作業焦点のサービスの実行：教育と実践におけるチャレンジの克服-特別支援学校における効果的な OB・OF 評価と実践の実行を導く OC 実践モデルを使うこと．第 16 回世界作業療法士連盟大会．2014 年 6 月 19 日，横浜市.

６．研究組織

(1)研究代表者

古山　千佳子（KOYAMA, Chikako）

県立広島大学・保健福祉学部 作業療法学科・准教授

研究者番号：90280205

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

塩津　裕康（SHIOZU, Hiroyasu）

宍戸　聖弥（SHISHIDO, Seiya）

大谷　真寿美（OHTANI, Masumi）

高木　雅之（TAKAGI, Masayuki）